

ケル ス ス 『医学論』 (6)

石 渡 隆 司

凡 例

- 一 この翻訳のテキストには、Loeb Classical Library. Celsus: De Medicina. London, (1935)を用いた。
- 二 翻訳に際しては、上記Loeb版にあるW. G. Spencerの英訳のほか、Eduard SchellerのÜber die Arztnissenschaft. OLMS Verlag. (1967)を参照した。
- 三 古典語文献の翻訳の際に重視されなければならない文献学上の問題に関しては、本誌の性質上、いちいち註記することを避け、ごく重要なものに限ることにした。
- 四 この翻訳の本誌への掲載の経緯については創刊号第二頁の「ケルスス『医学論』連載に当って」を参照されたい。

はじめに

本号に掲載したものは、第五号に続くケルスス『医学論』第三巻の最後の部分である。ここではこれまでに述べられなかった、やや特殊な疾患が扱われている。

ケルススはこれらの疾患の治療には、他の疾患とは違う特別な注意を必要とすると考えているが、この場合にも食事療法を基礎に、瀉血、浣腸、下剤の使用、塗油、パップ、運動、摩擦、入浴などの組み合わせを中心としている点では、他の疾患の場合との本質的な違いを認めることはできない。ただ今日の用語で言えばストレスに当たるような各種の不安や恐怖、さらに仕事上の煩わしさなどを取り除くための配慮がみられることは興味深い。

また、てんかんの民間治療法のひとつとして、死んだばかりの剣闘士の血液をまだ温かいうちに飲んでいたという、今日の臓器移植の先駆けのような事実が述べられていることは注目に値しよう。

なお、最後の二十七の4については3までの内容と連続性が乏しく、写本の編者が誤ってここに挿入したもののという説が有力である。

左に今回掲載分の節毎の内容を掲げておく。

- | | | | | |
|-----|----------------|-----|---|-----------|
| 二十二 | 肺癆性疾患とその種類について | 二十七 | 1 | 麻痺について |
| 二十三 | てんかんについて | | 2 | 臍の不随について |
| 二十四 | 黄疸について | | 3 | 振せんについて |
| 二十五 | 象皮病について | | 4 | 体内の膿瘍について |
| 二十六 | 卒中について | | | |

第三卷(続)

〔III〕 肺癆(tubes)にかかった患者は多くの場合病状が長引き、危険も少なくない。ところで肺癆にもいくつかの種類がある。第一のものは、身体に十分な栄養が行き渡っておらず、つねに身体から養分が出て行くだけで、少しも入ってこないために生ずる極度のやつれである。このような肺癆はそれに対抗する間もなく命を落としてしまう。ギリシア人はこれをアトロピアと呼んでいた。この種のもものは通常おおむね次の二つの原因によって起こる。すなわちある人々は過度の恐怖から少ししか摂取しないし、他の人々は欲望にまかせて必要以上に摂取しすぎるのである。それゆえ身体は欠乏によって弱るか、あるいは摂りすぎることによって冒されるのである。二番目の種類はギリシア人がカケクシアと呼ぶもので、この場合には身体そのものの病的な性質が関係していて、そのためにすべての栄養物が流出してしまふのである。このような病気は多くの場合、長患いのために身体が冒されてしまっている患者に起こるが、そのような患者はたとえその病気を免れたとしても、健康な身体を取り戻すことはできない。こうした病気は間違つた治療のために身体が冒されたり、長い間の経済的な困窮から栄養が不足していたり、風変わりな食べ物や、有害な食事を摂っていたり、何かそれら類することによつても起こる。このような場合には、衰弱の他にも時として皮膚の一带が頑固な水泡や潰瘍によつてすっかり荒れてしまつたり、身体のどこかが腫れたりするのが普通である。

三番目のものはたんに病気を長引かせるだけでなく、最も危険な種類に属しており、それらはギリシア人がプティシスと呼んでいたものである。この種の疾患の多くは頭部に始まり、そこから肺に流れ込み、そこに潰瘍ができる。そのためここから軽い発熱が生じ、いったん鎮まってもまた繰り返してくる。また多くの場合咳

が出たり、血の混じった痰が出たりする。そのような場合、排出された痰を火に入れてみると悪臭がする。したがってこの種の病気がどうかを疑っている人は、この方法を目安にしているのである。^(二)

患者が肺癆であるときには、まずそれがどの種類のものであるかに注意する必要がある。ついで患者の身体が栄養を吸収していないだけであることが分かったなら、その原因に注目しなければならぬ。そしてもしその患者が摂取すべきものよりも僅かの食事しか摂っていないのであれば、食事を追加しなければならぬが、それも沢山食べることに慣れていない身体が急に多量に食べて消化不良を起こすことがないように、少しずつ摂らせなければならぬ。反対に適量よりも多く摂ることに慣れている患者に対しては食事を控えるのを一日だけとし、その後には僅かの食事を摂らせることから始めて、適量になるまで毎日増やしていくようにする。

これらの他に、あまり寒くないような場所を、太陽を避けながら散歩することや手の運動を行うことも有益である。また、もし患者が散歩や運動に耐えられないほど弱ければ、できれば自分自身で身体を揺すったり、塗油したり、しかもできるなら一日に何度も、食事の前後に、ときには油に何か身体を暖めるようなものを加えて、汗が出るまで強く擦ることが有益である。また皮膚を柔らかくするため、空腹時に身体のあちこちの皮膚を搦んで引っ張ること、あるいは皮膚の上に樹脂を当てがったり取り去ったりした後でそれをするのが有益である。ときには入浴も役に立つが、それはごく軽い食事を摂った後にかぎられる。また浴槽の中で少量の食事を摂るのもよい。もし入浴をせずに摩擦をしたのなら、摩擦後すぐに食事をすべきである。そのさいには食事は消化しやすいものであること、またとくに栄養価の高いものであることが必要である。それゆえワインも有益であるが、酸味の強い(辛口の)ものを用いなければならぬ。というのもそれは利尿作用をするからである。

もし身体が悪液質(malus corporis 全身衰弱症)に冒されている場合には、まず食事を控えさせ、ついで浣腸をし、それから少しずつ食事を与え、続いて運動や塗油や摩擦をさせなければならぬ。このような患者には度々入浴させることが有益であるが、それも空腹時に、しかも汗を出すまで入れておかなければならぬ。食事にはたっぷりした、さまざまな種類の材料からなる、おもゆ状のもの(succus)が必要だが、排泄の容易ではない患者に対しては辛口のワインで排泄を促す必要がある。瀉血はその他の手段にも立たないときにだけ試みるべきである。瀉血はいま述べたような仕方ですれ以外の手段も併せて試みることができるように、何日もかけて少しずつ行わなければならない。

8

もし病気がそれ以上にひどい真性のプティンスなら、最初からすぐに立ち向かわなければならない。それとこのもいったん根付いてしまったような病気に打ち勝つことは容易ではないからである。もし体力が許すなら、長い船旅や環境の変化が必要である。それも患者が旅立つ場所よりももっと温暖な(densius)環境を求め(四)る必要がある。したがって一番よいのはイタリアからアレクサンドリアに行くことである。多くの場合この病気の初期にはそれに耐えられるにちがいない。それとこの病気は大部分、身体之最も頑健な十八歳から三十五歳の間にかかるからである。(五)もし患者の身体の状態がそれに耐えられないようなら、遠くには行かずに船に揺られているのが一番よい。もし何かの理由で船旅をすることができない場合には、担架か何かに載せて揺らすのがよい。そのさいには患者を、精神の動揺をきたすような一切の仕事から切り離しておくべきである。眠りにも配慮しなければならぬ。治療が軽減しようとしているものを無駄にしないためにも鼻風邪に用心しなければならぬ。不消化と直射日光や寒さも避けなければならぬ。口を保護し、喉を覆い、それぞれに適した治療によって咳を止めなければならぬ。また熱が出ている間は、あるときには食事を控えること

9

によつて、またあるときには時宜をえた食事を摂らせることによつて熱を下げなければならない。またそのよ
うなときには水を飲ませることが必要である。しかし、頭痛があるとき、高熱やそれによつて引き起こされた
過度の口渇があるとき、あるいはまた心窩部に腫れのある場合や胆汁性の尿が出たり、出血のあるときにミル
クを与えることは毒を与えるのと同じである。ただし、病気がプティシスの場合には、その他の慢性的で治癒
の困難な熱性疾患の場合と同じようにミルクを与えることは適切な措置である。^六もし熱がまだ出ていないか、
あるいはすでに引いたような場合には適度の運動、とくに散歩や軽い摩擦をしなければならぬ。その場合に
は入浴は不適當である。食事は最初はニンニク(alium)やニラ(porrum)、またニラを酢に浸したもの、ある
いは同じように酢に浸したキクジシャ(intubus)やメボウキ(ocimum)やレタス(lactuca)のような刺激性
のあるものを与え、その後には大麦(tisana)か曳き割り麦(halica)のおもゆ(sorbitio)か、ミルクを加え
たオオトミールを与えるのがよい。米も、また、もし上述のようなものがなければ、曳き割り小麦も同じく有
益である。右に挙げた食べ物を時々変えて交互に与えるのも効果的である。また何か中程度の栄養価の食べ物、
とくに火に焙った脳や小魚やそれに類似したようなものを加えるのもよい。小麦粉を羊か山羊の脂と一緒に混
ぜ合わせて煮つめたものは薬効がある。ワインは軽いものか辛口のものを用いなければならない。この程度の
ものであれば病氣と戦ふことはさほど困難ではない。病状がもっと重く、熱も咳も治まらず、身体が弱ってい
くのがみられたなら、いっそう強力な治療が必要である。

潰瘍は焼灼した金属で顎の下や首の前部と胸の両側のそれぞれ一箇所、またギリシア人がオーモプラタイと
呼んだ肩甲骨の下の所で除去しなければならぬ。^七そのさい咳が止まないうちは潰瘍の除去に手をつけてはな
らない。というのも咳に対してはまた別の治療をしなければならぬことは明らかだからである。その後、日

に三回か四回、四肢の先端を強く摩擦すること、胸を手で軽く擦ること、食後一時間後に、腕や脚部を摩擦することが必要である。十日目毎に患者を湯に油を混ぜた浴槽に入れること。その他の日には水を飲ませ、その後でワインを飲ませる。もし咳が出ないなら、冷たい飲み物を、咳が出るようなら微温のものを与える。毎日の食事は咳の引いているときに与えるのがよい。それらに加えて摩擦や揺り動かしも必要である。四日または五日目には先述のような刺激性のある食べ物を摂らせ、ときには酔に漬けたタデ (*herba sanguinalis*) やオ

14

オバノ (*plantago*) を用いる。オオバノの液汁そのものや野生ニガハッカ (*marrubium*) 液を蜂蜜と混ぜて煮立てたものも治療薬になる。前者については杯でちびちびと飲み、後者は匙にたっぷり入れたものを少しずつ嘗めさせる。あるいはテレベンティナ樹脂を半分、残りの半分を蜂蜜とバターを入れたものとを混ぜて煮立てたものを嘗めさせるのもよい。しかしこれらの治療法のうちでもとくに効果的なものは生活法、車や船に揺られること、粥を与えることである。いずれにしても下痢をしないようにしなければならぬ。この病気の場合には度々吐くこと、なかでも咯血は危険の兆候である。いくらかよくなり始めた患者には運動、摩擦、食事の量を増やす。その後で、息を止めておいて胸を自分で摩擦させる。しかしワイン、入浴、性交はしばらく控えさせなければならぬ。

〔二三〕 よく知られた病気の中に、てんかん (*comitialis, major*) と呼ばれているものがある。人が突然に倒れ、口から泡を出し、その後時間がたつと正気に戻り、自分で起き上がる。この種の病気は女性よりも男性に多く起こる。そしてこの病気は一生の間続くが、生命に危険がないのが普通である。しかし、時として病気の初期には死亡に至ることもある。すなわちもし治療が効果を上げないと、男子は出精期に、女子は初潮期に患者が死ぬことも少なくない。患者はあるときには筋肉のけいれん発作を伴い、ときには発作なしに倒れ

2

る。ある医師はこれらの患者を、嗜眠病の患者を目覚めさせるときに試みるのと同じ仕方で起こそうとする。

しかしそのような処置は全く無意味である。それというのも、嗜眠病の患者でさえそのような処置ではけつして治りはしないが、ましててんかんの患者は、目覚めもしない。そのうえ患者を飢え死にさせてしまふ結果にもなりかねない。それにてんかんの患者はいずれは我に返るからである。もし患者が筋肉を硬直させることなく倒れるなら、瀉血してはならないし、またたとえその発作があつたとしてもその他に瀉血を促すだけの症状がない場合に、瀉血してはならない。しかし浣腸か、黒シユロソウ (veratrum) の下剤を使用する必要があ

3

る。さらにもし体力があるようなら浣腸と下剤の両方を併用するのもよい。ついで頭を剃って油と酢を振りかける。三日後には発作の起こつた時間の後、できるだけ速やかに食事を与えなければならぬ。この病気の患者にとっては粥やその他の柔らかく消化しやすい食事も、また肉、なかでも豚肉も適していない。これらの患者に合う食事は中間的な素材で作られたものである。それというのも彼らにとって栄養は必要であるが、不消化は避けなければならぬからである。それとともに彼らは日光、入浴、火、またおよそ身体を熱くさせるようなもの、さらに寒さ、ワイン、性交、危険な場所を眼にすること、なんであれ恐がらせるようなすべてのもの、嘔吐、疲労、心配事、仕事に關することはいっさい避けねばならない。

三日目には食事を与え、四日目は中断し、以後十四日目が過ぎるまで食事は一日おきに同じ時間に与えなければならぬ。病気がその期間を過ぎれば、患者から急性病の激しい症状も消える。症状がいつまでも残るようなら、もはや慢性病として治療すべきである。もし最初に発作の起こつた日から同じ医師が患者をみてきたわけではなく、頻繁に発作で倒れるような患者を後から託されたような場合には、直ちに先述したのと同じ食事法を適用して患者が発作で倒れる日を待ってみなければならぬ。それから、先に挙げたように瀉血をする

4

か、浣腸をするか、黒シユロソウで浄化しなければならない。ついでその翌日からは心配な食べ物はいっさい避けて、先に示したような食事によって栄養を補給すべきである。 5

これらの処置によっても病気が治まらないようなら白シユロソウを試してみる必要がある。そして何日も間を置かずに三回か四回使用するが、発作のないときには度々使ってはならない。(白シユロソウによる浄化の) 中間に当たる日には前に(第三卷第三章)述べた食事に何かを加えて患者の体力を補強しなければならない。

朝、目が覚めたときに頭を除く患者の身体を古い油で軽く擦り、その後できるだけ平らな長い距離を散歩させること。散歩の後は暖かい場所で、強く長く、患者に体力があるなら二百回以上マッサージをすること、ついで頭に多量の水をかけて冷やし、少量の食事を摂らせ、休ませる。夜になる前にもう一度散歩をさせ、腹部と頭部には触れないようにして再び激しいマッサージをし、その後で夕食を摂らせて、三日か四日経ったら、一度か二度刺激性の強い食事を摂らせることが必要である。 6

これらの処置をしてもまだ病気が治まらない場合には頭を剃り、酢と硝石とを加えた古い油で塗油し、塩水をかけ、空腹時に水で割った海狸香(カストレウム)を飲ませる。ただし飲み物としては沸かした水以外のものを与えてはならない。ある人々は刺し殺された剣闘士の血をまだ熱いうちに飲み込むことによってこの病気を治した。^(二三) 彼らの場合には悲惨な手段(薬)がさらに悲惨な病気を癒すことができたのである。しかし、医者になしうる最後の手段としては、両足の踵^{かかと}(talus)の近くから少量の瀉血をすること、後頭部を切開してそこに吸い玉を当てること、さらに後頭部とその下の、椎骨と頭部とが接しているところとの二箇所を赤熱させた焼灼金具で焼灼することによって有害な体液を排出させることである。 7

それらの方法を用いても病気が治まらないなら、おそらく一生続くような性質のものである。そのような場

合には病状を軽くするために、運動すること、十分にマッサージすること、先に述べたような(第三章)食事をすること、またとくにわれわれがしてはならないものとして列挙したような全てのことを避ける必要がある。

〔二四〕 同じようによく知られている病気として、人々が黄疸(虹色の病気)とか王家の病気とか呼んでいるものがある。ヒポクラテスはこの病気について、熱病で七日間以上を過ごした患者に生じたものは、心窩部の組織の軟化が起きるだけで安全であると言っている。ディオクレスは単刀直入に、熱の後に生じたものは良性で、後から熱の出るものは致命的であると言っている。ところでこの病気であることを知らせるものは色、なかでも眼の色である。すなわち本来は白くなければならないところが黄土色になる。その他に普通は喉の乾きと頭痛とが加わるが、しゃっくりや心窩部の右側の硬化がみられることも少なくない。身体を激しく動かすと息苦しさや四肢の弛緩がみられることもある。また、この病気が長く続くようだと、全身が青白くなる。

最初の日には患者に食事を控えさせなければならない。二日目には浣腸をし、その後、熱があるようならそれにふさわしい食事法で熱が引くようにする必要がある。熱がない場合には飲み物としてヒルガオ(scamonia)か、擦り潰したシロフダンソウ(beta alba)を水に溶いたものか、あるいは苦胡桃やニガヨモギ(absinthium)か、アニスの実——この最後のものについてはほんの僅かであればならない——を蜂蜜酒で割ったものを与えること。アスクレピアデースは患者に、二日間だけではあったが浄化のために、すなわちその利尿作用によって(病気を)撃退するために塩水をも飲ませていた。ある医師たちはいま挙げたような治療法を全て省いて、利尿のための飲み物と栄養素の薄い食事だけで同じ効果がえられたと言っている。私の見解ではそのような場合、もし患者に十分な体力があるなら、より強い治療法を用いるし、もしそれほど体力がないなら、より穏や

かな処置を選ぶのがよい。もし浄化をするなら、その後、最初の三日間は中程度の材料でつくった食事を控えめに摂らせ、腸を柔らかくしておくために塩気のあるギリシアワインを飲ませることが必要である。その後の三日間は肉も多少は入った強めの食事を摂らせ、飲み物には水だけを用意しておく。次にはまた中程度の食事に戻すが、そのさいには前よりも満足するような量を摂らせる。またギリシアワインは省いて未熟の辛口ワインを飲ませるようにする。この食事法は、ときには刺激性の強い食事を交えたり、またときには塩気の強いワインに戻したりしてもよい。しかし、いずれの場合にも運動やマッサージをすること、そのうえ、冬であれば入浴が、また夏であれば冷たい水で泳ぐことが必要である。きれいなベッドと部屋が、気晴らしや冗談、芝居気やふざけなどによって、精神を爽快にしなければならぬ。この病気が、王家の病気と言われているのはいま挙げたような治療法のためである。いくつかに分けて、心窩部の上にパップを貼るのは効果的である。もし肝臓や脾臓が病んでいるなら、そこに乾いたイチジクの実を当てることも有効である。

〔二五〕 ある地方ではごく頻繁にみられ、ギリシア人が象皮病と呼んだ病気について、イタリアではほとんど知られていない。^(二五) この病気は慢性病に数えられている。この病気は全身を冒すため、骨も悪くなるといわれている。身体の表面にさまざまな斑点や腫瘍ができ、それらの赤い色が徐々に黒褐色に変わっていく。皮膚の表面が均一的ではなく、厚かったり、薄かったり、硬かったり、柔らかかったりし、あたかも何かの鱗のように粗くなり、身体がしぼんでくるが、顔やふくらはぎや足首が腫れてくる。病気が古くなると手や足の指は腫瘍で隠れてしまうほどになる。熱が出るとそうしたひどい状態の病人は容易に死へと追いやられてしまう。したがって、最初のうち、すぐに血液を二日間続けて取るか、あるいは黒シユロソウで腸を緩くするかしなければならぬ。その後は食事を我慢できるぎりぎりの範囲に制限する。ついで体力が少し戻ったら浣腸

をする。その結果身体が軽くなったところで、体操、とくにジョギングをする。まず身体そのものを動かすことで汗を出し、ついで乾燥した発汗室で汗を誘導すべきである。その間には体力を消耗させないように軽いマッサージをする必要がある。入浴させるのはごく稀にしなければならない。脂肪分や膠質のあるものやガスを出させるような食事を避けること、最初の日を別にすればワインを与えることは間違っていない。身体を保護するにはオオバコを摺り潰して塗ることが一番よいように思われる。

〔二六〕 われわれは稀にはあるが心も身体も無感覚になった心身喪失状態を目にすることがある。^(二六) それらの状態は稲妻に打たれてもなるが、病気によってなることもある。ギリシア人はそうした病気を「アポプレークシア」^(二七)（卒中）と呼んだ。これらの患者には瀉血をしなければならぬ。また白シュロソウや浣腸も用いる必要がある。その後で、マッサージをし、中程度の材料の、脂肪分をほとんど含まない食事、しかしいくらか刺激性のある食事を摂り、ワインは控えなければならぬ。

〔二七〕 1 筋肉の弛緩はどこにでも頻繁にみられる病気である。この病気はときには全身を、ときには限られた部分を冒す。昔の著述家たちは、全身を冒すものをアポプレークシア、部分だけを冒すものをパラリシスと名付けていた。しかし私はいずれをもパラリシスと呼びたいと思う。ところで、四肢の全てが激しい弛緩に冒された人はまもなく死ぬのが普通である。またもし死を免れた場合でも、暫くは生きられても健康を回復するまでになることは稀である。大半の場合には哀れな精神状態を引きずって生きることとなり、記憶も喪われる。^(二八) しかし、部分だけを冒す病気は決して急性のものではなく、慢性のものである場合が多く、治る可能性もある。もし全ての四肢の激しい弛緩に冒された場合には、瀉血を施すことによっては、あるいは死に、あるいは治る。その他の治療法によって健康を取り戻すことはほとんどなく、ときに患者の死を引き延ばしはす

B

るが、その間にも生命は冒されていく。瀉血をした後も運動機能も意識も戻らないようなら、何の希望も残ってはいない。もしそれらが戻るようなら健康回復の望みもある。

また、部分だけが冒される場合には、体力と病気の程度とによって、瀉血をすべきか、浣腸をかけるべきか

C

を決めなければならない。その他の処置についても同じように、それら二つの条件を見合わせてなされなければならない。寒さはとくに避け、すこし経ったら、もし可能ならすぐにも、自分で歩いてくるようにして運動させるようにする。また足に力がなくてできない場合には、担架で運ぶことによつてか、ベッドの上で身体を揺るかする。その後、冒された四肢を、できれば自分で、それができなければ誰かの助けを借りて動かし、自分の通常の状態まで伸ばすようにしなければならぬ。さらにイラクサ (*urtica*) で叩いたり、また身体が赤くなるまでカラシ (*sinapus*) をつけたりして、麻痺している四肢の表皮を粗くして刺激をすること

D

も有益である。砕いた海葱 (*scilla*) や玉葱を適当な比率で乳香 (*tus*) と混ぜ合わせたものも役に立つ。また樹脂を皮膚に塗って、三間目毎に皮膚を引き剥すことや、時々メスを入れず吸い玉をいくつかの場所に当てることも効果がある。また塗油のためには古いオイルか、酢と油を混ぜた硝石のいずれかが最も適している。さらに海水を温め、もしそれが得られなければ塩水を温めたもので患部を温めることがとくに必要である。どこかの自然の遊泳地か、人工のプールで身体をできるだけ使うこと、とくに冒されている四肢を動かすことが望ましい。^(二九) それらが無い場合には入浴しながらでもよい。食事は中程度のものとし、とくに野生の鳥獣の肉を摂るべきである。飲み物にはワインではなく湯を与える。もし病気が古いものであれば、四日か五日に一度程度浄化のために、塩分の多いギリシアワインを飲ませてもよい。夕食後に嘔吐させるのも有益である。

2 時として筋肉に痛みが生ずることがある。その場合にはある人々が指示しているように、嘔吐も、利尿

劑を用いて尿を排出させることも、また運動によらずに汗を出させることもよくない。水を飲ませ、一日に二回ベッドの上で身体を十分に時間をかけて軽くマッサージをし、その後息を吸っている状態で自分で上肢をできるだけ動かすこと。入浴の機会はごく稀にし、時折旅行によって環境を変えることが必要である。痛みがあるときにはその箇所を油を入れないで水で薄めた硝石を塗ってから包帯で巻き、その下に適度に温めた石炭と硫黄とを置き、しばらくの間下からその煙に当てる。それをかなりの間繰り返さなければならぬ。しかしそれをするのは十分に消化した後の空腹時であることが必要である。痛む場所に度々吸い玉を当てること、また牛の膀胱を膨らませた皮袋で患部を軽く叩くこと、また、ヒヨス (*hyoscyamus*) とイラクサの種を砕いたものをそれぞれ同じくらいの割合で脂肪と混ぜ、それを当てること、硫黄を入れて沸かした湯で温めることも有効である。^(二) 湯を一杯に入れた皮袋か大麦粉 (*hordeacia farina*) とアスファルト (*bitumen*) と混ぜたものを患部に当てるのもよい。なかでも、痛みに対しては強く揺り動かすことが有益である。しかしこの方法はその他の痛みに対しては最悪の治療法である。

3 蹠の振せん^(三)に対しても利尿剤による尿の排出は同じく間違いである。入浴や熱した乾燥室での発汗は有害である。水を飲ませること、早足で歩行することが有益である。それから塗油と摩擦をするが、できれば自分自身でするのがよい。ポールゲーム (フットボール) かそれに類する運動で上肢を持ち上げるようにする。どんな食事でも消化を助ける状況があれば食べさせてよい。食後すぐには治療を控えることが必要で、性交は稀にすべきである。ともかく患者がこの病気に加かったら、すぐにベッドの上で油をつけてから、しばらくの間大人の手よりも子供の手で軽くマッサージをするのがよい。

4 どこか身体の内部にできた膿は、その場所が分かかったら、有害な成分をもった結節ができないように、

膿を退散させるためのパップを貼らなければならぬ。もしそれに成功しなかったら、次には分解させるパップを使って膿を散らさなければならぬ。もしそれでもうまくいかなければ、膿を出させ、続いて膿を完熟させる必要がある。全ての膿瘍は破れることで終わる。膿が腹部や口から外に出てくるのがその証拠である。しかしどこの膿であれ、それが外に出てくるのを抑えるようなことをしてはならない。まずスープと湯とを与える。膿の出るのが止まったら、消化がよく、しかも強性の食べ物や飲み物を、最初のうちは微温のものを与え、次第に冷たいものに切替えるようにする。最初は松の核やギリシヤ胡桃やアペラナ胡桃を蜂蜜と一緒に食べなければならぬ。その後により完熟していて傷を入れて膿を外に出すことができそうな所から膿を取り去らなければならぬ。この段階の治療法としてはニラか苦ハッカ(marrubium)のエキスを摂ること、全ての食事にニラを加えることである。病気がない部分を摩擦したり、ゆっくりとした散歩も有効であろう。しかし、疲れるような散歩やジョギングやそれに類するような治療法は、回復しようとしている潰瘍にとっては逆効果となる。それというのもこの病気の場合には咯血が最も危険であり、したがってそれを避けるために万全を期さなければならぬからである。

註

(一) 英訳者のスペンサーは、この箇所注でケルススが「病的なもの」と「栄養失調」との双方に「肺癆性疾患」(タベーズ (tabes)) という同じ用語を使っていることに對する疑問を提出しているが、タベーズは現代医学でも、脊髄の損傷を主因とする運動麻痺を引き起こすウイルス性の tabes dorsalis 「脊髄癆」と、糖尿病を主因とし、下肢の運動神経障害を引き起こす tabes diabetica 「糖尿性脊髄癆」の双方に用いられている。この箇所述べている治療法から察すると、ケルススも類似した症状にもかかわらず、原因を異にするこの二つの疾患を区別していたものと思われる。

(二) ヒポクラテス『箴言』第五章一節参照。

(三) ここで「より温暖な」と訳した \wedge densius \vee は、本来は「より濃密な」、「より密集した」という意味の語である。独

訳者シェラーはこの語を前後の関係から「より温暖な」と取るべきであるとしている。ここではそれにしたがって訳した。

(四) プリニウス『大自然誌』三一巻六三節には、肺癆の人にエジプトまで船旅をすることが奨められているのは、エジプトの土地そのものが病気によいからというわけではなく、長い航海の間中身体が揺られることが体質の改善を促すからであるという趣旨のことが記されている。

(五) ヒポクラテス『箴言』第五章九節参照。

(六) ヒポクラテス『箴言』第五章六四節参照。

(七) ヒポクラテス『疾病について』第三卷五節参照。

(八) ヒポクラテス『箴言』第五章一四節参照。

(九) スペンサーは、ケルススが「てんかん」に、 \wedge エピレプシー \vee というギリシア語由来の学術語を使わずに「議会病」という俗称を使っているのは、ローマでは \wedge エピレプシー \vee という語が不吉な出来事を予告するように受けとられていたからであるとしている。「議会病」という俗称は、議員の誰かがこの病気になると会議の日程が延長されたこと由来する。同じ症状でも名称を違えることによって、一方は不吉なことと、他方は神の顕現とみなされていた。

(一〇) ヒポクラテス『箴言』第五章七節参照。

(一一) ヒポクラテス『神聖病』第一節参照。

(一二) プリニウス『大自然誌』第二八卷二節参照。

(一三) ヒポクラテス『箴言』第四章六四節参照。

(一四) ヒポクラテス『疾病について』第三卷一一節参照。

(一五) プリニウス『大自然誌』第二六卷五節のハンセン氏病の記述はこの箇所と関係があるとする説もある。

(一六) ヒポクラテス『疾病について』第三卷三節参照。

(一七) ヒポクラテス『箴言』第三章三一節、ヒポクラテス『疾病について』第二卷八節参照。

(一八) ヒポクラテス『箴言』第二章四二節参照。

(一九) 卒中の予後治療として、現代のリハビリ療法にも採用されている水中での四肢の運動療法に言及していることは興味深い。

(二〇) 「筋肉」と訳した語は \langle nervus \rangle で、周知のようにこの語は現在では「神経」と訳される。ケルスの当時は、現在の筋肉に当たる \langle musculus \rangle という語、また神経に当たる概念もなく、 \langle nervus \rangle は「筋肉」もしくは「臄」に相当していた。

(二一) ディオスコリデス『薬物誌』第四卷六九参照。

(二二) 「振せん」と「震え」(tremos) の違いについては、第一卷九の三、第二卷八の一六参照。